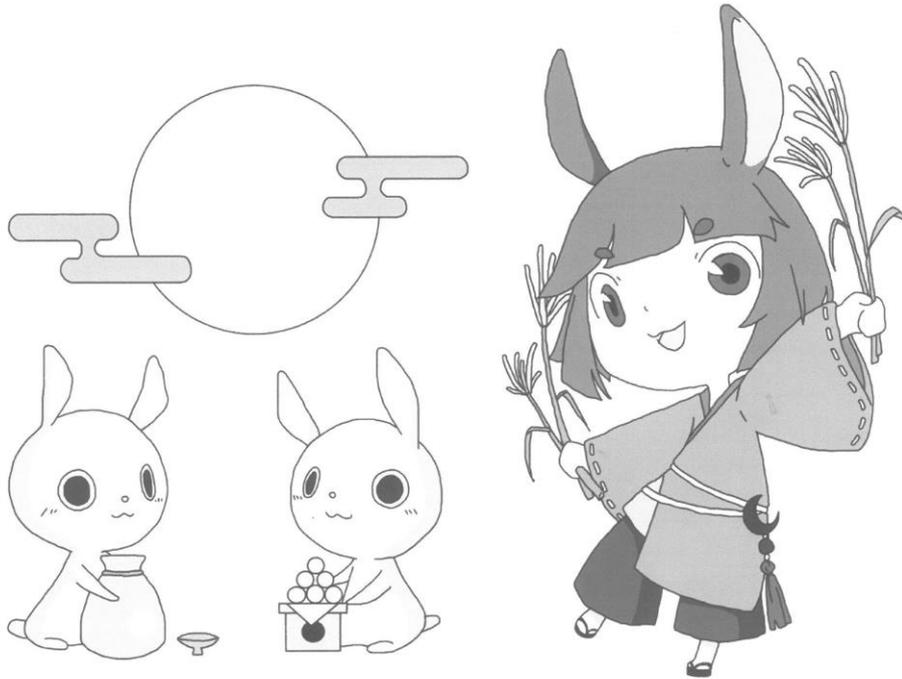


# われら同胞

NO.58



ホームページ上でもご報告させていただきましたが、8月13日（木）さつき共同作業所の利用者1名の新型コロナウイルス陽性が判明致しました。作業所の利用者・職員で濃厚接触者と判断された方につきましては、PCR検査を受け、幸い全員陰性との結果を得ております。保健所の指導により8月21日（金）までは経過観察期間とし、さつき共同作業所を閉所させて頂きました。

まずは、不運にも新型コロナウイルスに罹患した方が、健康を取り戻すようお願いいたします。感染症の症状のみならず、親しい人や普段の生活から離れ過ぎなければなりません。大変なストレスだと思えます。心よりお見舞いを申し上げます。この度のことが、施設内での感染へと広がらなかったことには、率直に安堵しています。感染された方自身の適切な対応と、事業所への迅速なご連絡のおかげでもあり、そのことにも感謝を表明したいと思います。

また濃厚接触者とされ、自宅待機となった利用者・職員の方々にも、慰労と感謝を表明したいと思います。感染者や濃厚接触者の隔離や自宅待機は、周囲の我々を守るためにお願いすることであり、その労苦には感謝しかありません。

これまで当法人としては感染防止のための可能な対策は行ってきました。また今後もより感染リスクを減らす努力は続けていきます。しかし8月の東京都のコロナ感染者数は高止まりの状況で、職員や利用者、いずれ誰かしらには感染がおきる覚悟も必要だと思っていました。また、今後新たにコロナウイルスに感染する方が出ることも、想定していくべきだと思っています。

感染症のもたらす不安や恐怖は、ともすると感染者やその周囲の方への忌避の感情に転化しやすいところがあります。実際、ネット上やテレビの中でさえ、感染者を非難するような言葉に接することがあります。

人類全体が新型コロナウイルスの脅威と戦っている今、誰かを攻撃するようなことで問題は解決しません。お互いに物理的に距離を取らないといけない今だからこそ、それぞれの気持ちを繋げ、排除と非難の言葉でなく、いたわりと感謝の言葉で乗り越えていきたいと思っています。皆さまよろしくお願ひ申し上げます。

新型コロナウイルス感染症に関するご報告  
 はらからの家福祉会 理事長 藤田英親

☆☆☆ 目次		☆☆☆	
1 p	新型コロナウイルス感染症に関するご報告	5 p	さつき共同作業所
2 p	コロナ禍で思うこと～新語・造語への違和感～	6 p	ネットワーク推進事業部
3 p	地域生活支援センター プラッツ	7 p	新職員紹介
4 p	グループホーム ピア国分寺	8 p	賛助会コーナー

## コロナ禍で思うこと／新語・造語への違和感

はらからの家福祉会 理事／総合施設長 伊澤雄一

新型コロナウイルスが全世界を席卷しています。感染者は200万人、死者は73万人をこえたとの報道があります（8月12日現在）。

わが国においては「G o t o」と「自粛」が同時に語られ、あたかもアクセルとブレーキを同時に操作する様相となり、混乱と葛藤が深まっています。そのあたりを受けてか、当機関誌も発行の乱れが生じてしまいました。まことに相済みません。

コロナ禍では数々の耳慣れない言葉が躍っています。「ステイホーム」「ロックダウン」「リモート」「クラスター」「パンデミック」等々、当初、違和感を覚えたこれらの語彙は、今日、私たちの日常の会話に普通に用いられる常用語となっておりあります。まさに「コロナの時代」を迎えているということなのでしょう。

この日常に入り込んだ語彙の中には気になるものがあるかもしれません。

その筆頭が「ソーシャルディスタンス」です。コロナ感染の拡大を防止するために人と人との間に距離をとることを求める言葉です。しかし「対人支援」を軸に、人の暮らしを支援することを生業としている私たちとしては、ディスタンスをもちながらの支援は成立しなくなります。間を置くべきは物理的距離であり、人同士が社会的に疎遠になるような方向はいけません。物理的には

疎遠になるような方向はいけません。物理的に間を置きながらも、この時だからこそ、人は互いに親密であるべきです。…というような声が多く寄せられたのでしょうか、世界保健機構（WHO）は意味を明確にするため「フィジカルディスタンス」（肉体的距離感）に言い換えてきています。

学者先生方が頻繁に使う「感染者の隔離」という言葉も実に気になります。隔離には「排除」という意味が潜んでいるように思え、コロナに罹患した患者さんを社会的に排除していくというニュアンスを感じます。「自粛警察」や都心からの来県者へのバッシングも、背景に「隔離＝排除」の思考が働いているのではないのでしょうか。感染者には「保護」が必要で、それを進めるといのが正確な表現ではないのでしょうか…。

コロナ禍も第一波が一時収束かと思われる時期から、「ウイズコロナ」という言葉も耳にするようになりました。「コロナと共に」というといかにも冒頭の「コロナの時代」を象徴するワードですが、ウイズという響きは「仲睦まじい姿」を想起させるものです。

はらからの家で実施しているピア活動（当事者の方たちが支援の担い手となる）の一つに、病院からご来所いただいた入院中の方々と交流を深

めるプログラムがありますが、その名は、まさに「おもてなしプログラム・ウイズ」です。そこには共感、共鳴をモチーフにした、ウイズ（共に／友に）なのであり、退院に躊躇いを覚えている人たちに、寄り添いながら安心と希望を送る、仲間としての活動です。

コロナはまぎれもなく災禍であり、仲間意識で相対するものではありません。というわけで、コロナにウイズを用いるのは、なんとも不思議な感じがしてなりません。

本稿は妙なこだわりの内容ともなりましたが、たかが言葉、しかしされど言葉という、今日この頃の心境を表明させていただきました。失礼いたしました。



# 平成31年度地域生活支援センタープラッツ事業報告

年間利用者状況	<p>① 対応種別</p> <table border="0"> <tr> <td>訪問</td> <td>358件</td> <td>ケースカンファレンス</td> <td>132件</td> </tr> <tr> <td>来所</td> <td>1,089件</td> <td>関係機関連絡</td> <td>1,140件</td> </tr> <tr> <td>同行</td> <td>102件</td> <td>電話</td> <td>5,425件</td> </tr> <tr> <td>メール</td> <td>0件</td> <td>その他</td> <td>25件</td> </tr> </table> <p>② 来所利用者数 3,173名（*平均来所者数 12.1名 / 日）</p> <p>③ プログラム 参加者数 833名（開催数 149回）</p> <p>④ 宅配弁当手配 438件</p> <p>⑤ ボランティア（実人数5名）プログラム回数 35回 傾聴ボランティア 32回</p> <p>⑥ その他 外部会議 138回 出向・出講 39回 家族会支援 5回 地域イベント（バザー参加） 2回</p>	訪問	358件	ケースカンファレンス	132件	来所	1,089件	関係機関連絡	1,140件	同行	102件	電話	5,425件	メール	0件	その他	25件
訪問	358件	ケースカンファレンス	132件														
来所	1,089件	関係機関連絡	1,140件														
同行	102件	電話	5,425件														
メール	0件	その他	25件														
利用者の属性等	<p>1. 利用者総数 300名 地活登録利用メンバー 90名 男性 44名 女性 46名 新規登録 11名 更新 86名 再登録 2名 平均年齢 51.0歳</p> <p>2. 指定特定相談支援事業利用者 107名（3/31現在）</p> <p>3. 指定一般相談支援事業利用者 1名（3/31現在）</p> <p>4. 障害者地域移行促進事業 担当圏域（北多摩西部圏域、西多摩圏域） 行政・事業者支援、研修開催、LP（ピアサポーター）活動 など</p>																
職員体制	<p>常勤：伊澤（管理者） 中野（所長） 角谷 毛塚 小野寺 山下 大竹</p> <p>非常勤：山内 保坂</p>																
開館状況	開館日数 265日																

## 〔平成31年度振り返り〕

31年度から市外の方の利用が制限される形になり、長く利用されていた方の顔を見ることがなくなってしまうました。寂しさや残念な思いはありません。しかし、あえて前向きに考えれば地元でのつながりを改めて意識するきっかけにもなったのではないかと思います。指定特定相談支援事業においては新規利用希望が年間通して途切れることなく推移しました。数が増えても質が担保できるよう意識して事業に当たってまいりました。障害者地域移行促進事業においては地域に事業者や行政機関から相談を頂くことも増え圏域担当に変わったことが浸透しつつあることが感じられました。

## 〔令和2年度活動展開にあたり〕

昨年度末から新型コロナウイルスへの対応が始まりましたが、現在においても感染拡大予防の観点から制限を設けながらの事業が続いております。対人業務でありながら直接の支援が制限されるという、業務の根幹が揺らぐような思いを日々感じております。世の中では「新しい生活様式」や「Withコロナ」といった言葉が広がっていますが、支援の現場においても新たな形を取り入れる必要があるのだと思います。具体的には・・・と言いたいところですがなかなか新しい形を考えるに至っておりません。プラッツやはらからだけではなく、日本全国、いや世界中で同じ課題に直面しています。ディスタンスを意識しなければならぬからこそ、つながりを大事にしてこの難局に立ち向かっていきたいと思えます。

# 平成31年度 ピア国分寺事業報告

## グループホーム・ショートステイ

グループホーム（4ユニット、定員26名）の年度内入退去は、入居者9名、退去者6名でした。退去した方の多くはアパートでの単身生活へと移行されましたが、再入院という形で退去となる方もいらっしゃいました。また、入居についての相談対応を36名の方に行い、複数の方が待機者となっております。

10月の台風19号直撃の際は、グループホームとしても多くの不安の中で一夜を越えました。入居者へ台風関連情報の発信、夜間は常勤職員を配置し、夜間の電話対応も開放して、安否の確認を行いました。幸い大きな被害はありませんでしたが、災害時の対応について課題が見えました。特に離れた場所にあるユニットの入居者の状況把握や情報提供について、検討の必要性を感じました。

年度の後半ではやはり新型コロナウイルスの影響を大きく受け、それは現在も続いています。交流会等の入居者が集まるようなプログラムは全て中止し、個別

の対応を基本に。職員も現場は縮小体制を組んでいます。必要な支援とのバランスも取りながら、できる限り感染症対策を講じてきてはいますが、入居者も職員も、常に不安と緊張の中で取り組んでいる状態が続いています。

ピア国分寺が東京都から受託している、退院促進を目的として入院患者を対象とした「グループホーム活用型ショートステイ事業」については、延べ296日（前年度261日）の利用がありました。多くの利用希望がありしばらく先まで予約で埋まる状況でしたが、こちらも新型コロナウイルスの影響で、利用対象である入院患者が外出禁止となり、年が明けてからはキャンセル対応に追われました。

総じて、とにかく五里霧中。年度の切り替わりも見えずいつのまにか跨いでいたように思います。

### 〈令和2年度は…〉

引き続き、新型コロナウイルスへの対応が大きな課題となります。入所施設として、入居者やショートステイ利用者の活動も大切にしながら、いかに感染を予防し、また万が一の際の感染拡大防止をはかるか、備品確保も含めより具体的な対策をはかっていきたいです。

しばらくはこのような対応が続く、と申しましか、今後は新たな支援の形が必要であるという表現が適切なのかもしれません。利用者、職員の安全と安心を確保しながら、グループホームそしてショートステイの大きなテーマである“チャレンジ”できる環境を、よりいっそう大切にしたいと思っています。



# 平成31年度さつき共同作業所事業報告

## 就労継続支援B型／自立訓練（生活訓練）

◆「運営」順調に増えていた通所者は新型コロナウイルスの影響で1月から減り始め2月3月は大幅に減少してしまいました。就労に向けて頑張ってきた方も大変な打撃を受けました。

◆「職員配置」3月から中堅職員1名が産休に入り、1名が3月末で退職しました。3月から運転の出来る新入職員1名雇用されたことで業務全体の負担軽減になつていきます。

◆「研修」職員各々の目的をもつて必要な研修参加に取り組んでまいりました。

受講した研修の振返りをスタッフ会議で行い、職員全員の知識の向上や共通認識、キャリアアップにつながっています。

◆「就労継続B」就労された方はいませんでしたが、厳しい状況の中でも就労に向け作業やプログラムを通して、出来ることを少しずつ積み重ねています。作業収入の増額は適いませんで

したが、今年に入るまで作業の参加者が増えていたことで空席が少なくなり、年度末に利用者数は落ち込んだにも関わらず、工賃を例年通り支払うことが出来ました。

内職も今年に入り受注は減りましたが、ハンドメイド品は、安定した売り上げを継続しています。

◆「生活訓練」月ごとの目標をたて、毎週の振返りを行い、利用者の日常的なニーズに添ったプログラムを行いました。より具体的に無理の少ないプログラムになり参加しやすい場ができています。プログラムの中で「小さな困った」から利用者主体のアンケート作成に繋がり、法人全体で協力し合える関係が出来ました。

講師を招いてのプログラムでは、各自の目的に添ったパソコン教室を行うことで、パソコンを通して知識の広がりに加え事務作業などの意識も高まっています。また、普段体を動かす機会が少ない方へ、ストレッチやヨガなど軽い運動をすることで心身の安定につながっています。

## 令和2年度 事業計画

◆「運営」・事業内容毎に目標の指標を可能な限り明確に設定したうえで、計画達成に向けて進捗管理が可能になるようにします。

・事業規模拡大の可能性、採算シミュレーション、処遇改善、ポストの新設によるキャリアアッププロセスなどを検討した中長期計画を策定します。

・どの時期にどの職員がどのくらい忙しいのかを把握できる仕組みをつくり、共有します。

◆「就労継続B」・今年度から実施している公園清掃と神明宮清掃の作業リーダー制が定着し、利用者の作業に対する責任感や協調性が育まれているため、他のグループ作業にもリーダー制を設けていきます。

・室内軽作業の種類を増やし、日常的に憩いで過ごす利用者を減らします。

・一般就労を目指す利用者へ勉強会を継続し、利用者のニーズに沿った講義の開催、それに伴うフィードバックを丁寧に行うと共に個別支援計画に連動させ就労支援を行います。通所困難になった方へ訪問による支

援等を行うことで社会的孤立を防ぎます。

◆「生活訓練」・今年度から開始した個別の月次目標を継続し、日常生活に必要な実践を意識した訓練を継続します。

・体調管理や就労を意識したプログラムの提供を行います。

・利用者が主体性をもって参加できる日常生活に必要かつ魅力的なプログラムを実施します。

・利用者のニーズを掘り起こし、個別支援を軸にプログラムの提供を行い、次のステップへつながる支援を意識します。

・訪問は状況に応じて柔軟な支援が行えるよう、スタッフの充実を図り関係機関とも連携を図ります。

以上の通り、前年度末に事業計画を策定しましたが、現在、感染症対策により運営に制限が余儀なくされておりあります。そのうえで、出来る限り利用者の生活の安心・安全を支えられる支援に邁進しております。

# ネットワーク推進事業部

## 令和1年度ネットワーク推進事業部事業報告

ネットワーク推進事業部ができた大きな背景には、障害者自立支援法ができてきたという様々な福祉サービスの転換期に、精神の分野についての病気や障害を、医療だ福祉だとばらばらの分野の視点にしているはならないという思いから始まりました。元々は社会福祉の目線から精神科クリニックを作る考えがありましたが、社会福祉法人立としては認めてもらえず、現理事長である藤田が2010年に「国分寺すずかけ心療クリニック」（略称すずかけ）を開業して、ばらばらにしないという考えの1つとしてスタートさせました。

## 令和2年度 事業報告

①国分寺すずかけ心療クリニックにおける業務

医療の場において、多職種のチーム医療で、行政・医療・保健・福祉・教育・就労等の様々な機関の方の力を借り、地域で生きる生活者としての利用者や家族とともに、デイケア・訪問看護・外来相談等に臨んでいます。デイケアは就労するための訓練場所と言われますがすずかけでは、安心して何がしたいかを考えられる環境を整え、会話する事を大事に考えています。毎年3〜4名は就労

や就労移行等の福祉サービスを自

分のタイミングで動いています。医療では指示、指導、訓練等当たり前口にしますが、それは危険な事と違います。変われる事か、変わりたい事か、変わらない事か吟味し、変えたい事か、変えられない事か吟味し、変えられない事を皆で受け入れ、周囲が変わり、変わりたい事を応援し、具体的に日々丁寧に行うことが大切であるという基本的な事を支援者であるはずの我々がいかにやれていないかを感じます。

②「地域ネットワーク多摩（通称ちたま）」（近隣4市の福祉・保健・医療連携）への積極的参加等、地域生活支援体制整備推進

ちたまに家族会にも入ってもらって3年目となり、話し合いや情報共有を続けています。オープンダイアログの研修をちたまとして参加していましたが、最終回の3月の研修が新型コロナで延期となりました。価値判断や評価を横において丁寧に声をきく、多様性を大切にすること、色々な当たり前のはずのことにスポットをあてる大切さを感じます。

③国分寺あゆみ会への協力と協働

提出物やニュースなどを作ったり、

家族相談会に協力させて頂いたりしながら、日常的にご一緒させて頂いています。協力や協働と事業ではありませんが、家族の話しを身近に伺える機会には、大変幸運と思います。新型コロナのため、蔭山正子氏をお呼びしての講演会が中止になってしまい、大変残念でした。

又精神病床数が世界1である多摩地区のいくつかの病院と立ち上げた家族支援（家族心理教育）を考える「多摩心理教育ネットワーク」では、「標準版家族心理教育研修会 in 多摩2020」を企画しましたが、新型コロナのため断念することになりました。

④リカバリー支援とピアとの協働、SHARE

SHARE普及委員会の一員として、研修会等を開催しました。クリニックではピアスタッフとともに研修を受けた精神保健福祉士や看護師がSHAREのツールを使つての訪問をさせて頂きました。又新型コロナ対策として、ウェブを使つてのSHAREを検討し始めました。

※SHAREとは、治療を受ける患者さんの希望とリカバリーの実現を助け、患者さんと主治医とのSDM (Shared decision making: 共同意思決定) を支援するために開発されたコンピュータシステムの愛称です。

## 令和2年度の抱負

新型コロナ禍、オンラインも含め新たな道具の選択肢を模索しつつ、安全第一ですが、色々やっていきたいと思っています。

①国分寺すずかけ心療クリニックでは、直接お会いできない場合、必要に応じて電話やZOOM等を使つて、つながりを絶やさずしたいと思っています。

②継続的にちたまに参加し、顔の見える連携をしていきたいと思っています。

③家族会がこの局面でも活動ができるよう、活動手段も含めた協働を行っていきたいと思っています。

④ピアスタッフとともにSHAREの普及活動等を継続したいと思います。コロナ禍、オンラインを使つたSHAREをやり始めましたので、継続していききたいと思います。

⑤強迫性障害の普及活動

世界保健機関 (World Health Organization: WHO) の報告では、生活上の機能障害をひきおこす10大疾患のひとつにあげられ、欧米では、全人口のうち強迫性障害にかかっている人は50〜100人に1人の割合といわれており、日本でも同じくらい割合になるとも考えられています。生まれてから生涯のどこかで罹ることも多い障害です。色々な障害が当たり前に受け入れられることは、障害があるなしに関わらず生きやすくなるかと思っています。

今後ともご協力ご指導をよろしくお願い致します。

## 新職員紹介

皆様はじめまして。3月に入職した真嶋信二と申します。所属はさつき共同作業所です。妻、長男(5歳)、次男(2歳)、長女(0歳)と亀(11歳)と暮らしています。作業療法士として、精神科病院やアウトリーチサービズで働いてきました。家庭・育児と仕事とのバランス、自分がやりたい仕事について考える中で、かねてからご縁を感じていたはらからの家福祉会に採用していただき、大変有難く感じています。医療分野が長かったので、体験する事も、感じることも新鮮で、日々学び直し、自分を振り返る機会を得られ、毎日ワクワクしながら働かせて頂いています。

さつき共同作業所に見学でお邪魔したとき感じた、温かく受け入れて頂いた感覚を、出会う皆様にお返しし、良い循環が生まれるように、働いていきたいと感じています。よろしくお願ひいたします。  
**新人からみた、さつき共同作業所紹介**  
引き続き新入職の真嶋です。今年の3月に入職してから今日まで、沢山の魅力を感じてきました。その一部をこの場をお借りしてご紹介させていただきます。

### 1. 「温かさ」

自己紹介でも書きましたが、さつきは職員も利用者の皆様も、受け入れてもらえる感覚、ホーム感を感じられる事が、大きな魅力だと感じています。さつきには「おはよう」「行ってらっしゃい」「お疲れ様」と温かく声を掛け合う文化があります。

### 2. 「希望を大切にしている」

さつきには、色々な希望を持った方がご利用されていると知りました。「就職したい」「お金を稼ぎたい」「絵を描きたい」「人の役に立ちたい」「学校みたいな感じを経験したい」など、様々な希望を持ち寄って下さっているのを知り、とても嬉しい気持ちになりました。

### 3. 「個性」

さつきにいますと、その場で過ごす皆さんが、とても個性を発揮されているのを感じます。大変な仕事も厭わず引き受けてくれる方、面倒な事も丁寧に根気よくやって下さる方、いつも笑顔で話しかけて下さる方、マイペースを守って、そのままの自分でいいんだと教えてくれる方。他にも、釣り、絵本作り、DIY、小説創作、プラモデル、ダンスやお笑い、自分を磨く本などなど、枚挙に

いとまがないほど、豊かな個性を感じ、わくわくする毎日です。

そしてこれらの魅力は、「安心」「個性」「希望」といった、さつきの理念を表すキーワードとも通じています。理念は組織の存在理由です。それをまさに体現されている利用者の皆様、そして理念の表れているさつきの文化に触れて、とても嬉しく感じています。

さつきは就労継続支援事業所です。今の制度上、工賃を多く出す沢山働く方が多い事業所が優遇されます。しかしお金には変換できない価値や貢献が沢山あり、それを大切にす文化やコミュニティをいかに育むか。さつきで働いて、その大切さを強く感じます。そのために自分も、理念を額縁から出して、皆さんとより豊かな土壌を耕していきたいらと感じています。

真嶋信二



昨年12月よりさつき共同作業所に非常勤でお世話になっております守安なみ江と申します。

遥か昔に7年程店舗設計の仕事に携わった後、家庭の都合で長く専業主婦として過ごしておりました。8年前から国分寺に居住し、細々とハーブの石けん教室を開く傍ら福祉関係のボランティアを続ける内にこちらに辿り着きました。さつきでメンバーさん達とご一緒させて頂く作業時間が大好きです。

資格も経験ありませんが、皆さまでに色々ご教授頂きながら誠意を持って努めて参りたいと思っております。どうぞよろしくお願ひ致します。

守安なみ江



# はらからの家福社会賛助会コーナー

<平成31年度11月から3月の間に賛助会費をご納入頂いた皆様(順不同 敬称略)>

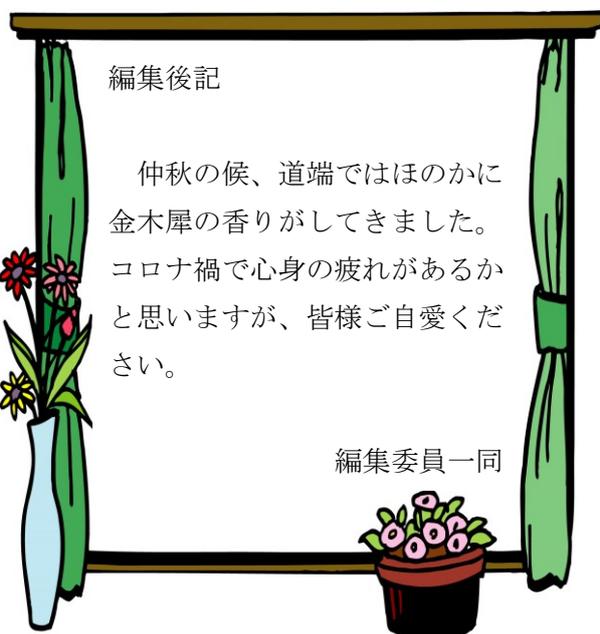
小峯 尚三 石井 紘子 植村 雅子 栗原 ミチ子 小林 輝雄 森 美知子 伊藤 善尚  
井上 洋子 原田 敬子 香山 充子 高見 法孝 三浦 香織 小宮 静子 上原 愛子  
杉山 健治 青柳 和枝 川崎 嘉代 竹内 幸子 服部 洋三 東京学芸大学福井研究室  
東京ヤクルト販売(株)瑞穂事業所 武蔵野はらっぱ祭り実行委員会 匿名3名 敬称略  
会員の皆様、本当にありがとうございました。今後ともなにとぞ宜しくお願い致します。

## 平成31年度(令和元年度)はらからの家福社会賛助会決算報告

単位:円

支出		収入	
役務費	4,103	賛助会会費	339,000
郵便手数料	13,464	(94名)	
法人寄付	350,000	その他収入	0
当期繰越金	8,507	前期繰越金	37,074
合計	376,074	合計	376,074

※郵便振替用紙を同封させていただきましたので、令和2年度賛助会費、何口(1口2千円)でも結構ですのお振込みいただくと幸いです。会費をご納入いただいた方のお名前を本紙に掲載させていただいておりますので、匿名希望の場合はその旨通信欄にお書きください。



### 編集後記

仲秋の候、道端ではほのかに金木犀の香りがしてきました。コロナ禍で心身の疲れがあるかと思いますが、皆様ご自愛ください。

編集委員一同

はらからの家福社会ホームページ

<http://harakaranoie.com/>

【編集人】社会福祉法人はらからの家福社会

〒185-0021

東京都国分寺市南町3-4-4

TEL 042-323-5637

【発行人】障害者団体定期刊行物協会

〒157-0072

東京都世田谷区祖師谷 3-1-17-102

【定価】¥120